

トリアル・アンド・エラー
Trial & Error

No.41



ラオス山岳民族のパッチ・ワークと日本語テキスト

パナニコム日本語学校	2
日本語家庭教師活動とは	4
「自立する日まで」	8
難民問題を考える草の根づくり	10
難民問題研究グループ報告	11
UNHCR 広報誌「REFUGEES」より	12

「カルチュラル・オリエンテーション・プログラム」

佐藤 和美

JVCの日本語学校があるパナニコム難民キャンプは、第三国への出国予定者のためのキャンプである。カオイダンキャンプなど、国境近くのホールディングセンターに収容された難民のうち、第三国定住を希望する人々は、希望する国の大使館に書類を提出する。そのなかで、大使館などで「受け入れの可能性あり」と判断された人が、パナニコムキャンプの一部、プロセッシングセンターに移される。ここで面接（インタビュー）を受け、結果が出るまで待機する。定住許可をえた人は、すぐ隣のトランジットセンターで、出国の準備をする。

性格上、後者での期間は短く、日本語学校の「生徒」のほとんどは、プロセッシングセンターの難民である。彼らは、戦火の地を逃れたという安心感はある。果たして定住が許可されるのか、許可されたとしても、見知らぬ異国でどんな生活が待っているかなど、大きな不安を持っている。しかも、面接から定住許可（不許可）の通知まで、日本に定住する場合、諸外国より時間が長くなる。

会話を教えるだけが日本語学校ではない

パナニコムキャンプにあるJVCの日本語学校は、基礎的会話だけを教えるわけではない。難民たちの持つ新しい生活への不安を取り除き、定住後は一日も早く日本社会になじめるような、実際の知識の教育も、重要なプログラムの一つとなっている。

例えば、乾期と雨期の国で育ったカンボジアの人たちが、日本の春夏秋冬「四季」について知ること、大事なことなのである。

日本語学校では、これまで1期3カ月ごとに、電話のかけ方、お金の使い方、四季の生活などを、フィルムやスライドなども使って説明してきた。

ところが最近、日本政府の受け入れる難民の人数が減ってきたこともあって、新しく日本に定住を希望する難民の数も減少、さらに定住許可決定の遅延が目立ち、たいていの「生徒」は初級的な教育は受講済み、という状態になってきた。

そこで、84年2月からは、定住後の生活を考え、もう一歩進んだ「日本の紹介」講座を行なった。より多くの人の出席を可能にし、しかも生徒が好きな



曜日を選べるよう講義は同じ内容のものを、月曜日から木曜日まで4日間企画した。

以下は、今年2月から5月まで実施された、第11期カルチュラル・オリエンテーション・プログラムの具体的内容である。

プロバングスを初めて使う難民もいる

●第1週「オリエンテーションについての説明」

日本とカンボジアとの共通点（仏教、米食）と相違点をあげる。生活、習慣を決める「文化」の存在に気がつき、学習意欲が高まるように工夫する。

会話：「～と言います。どうぞよろしく」など自己紹介の仕方の練習。

●第2週「パナニコムから大和センターまで」

プロセッシングセンター→トランジットセンター→バンコクの移民局(イミグレーション)→日本大使館、病院での最終チェック→ドムアン空港→機内→成田空港→大和センターまでの、諸手続き、交通機関、所要時間などを説明。椅子を使って、飛行機内の水洗トイレの使い方も…。

会話：「なんでいきますか」「どのくらいかかりますか」の応答の練習。

●第3週「買いものの仕方」

日本の食べもの、店（肉屋、魚屋、八百屋など）を紹介。

会話：「どこにありますか」など道をたずねる練習。次週作るミソ汁の材料を買う会話の練習。

●第4週「炊事の仕方——ミソ汁を作る実習」

台所用品（ガスレンジ、なべ、まないた、包丁、茶わん、はしなど）の名前と使い方を、実物を見な

がら紹介。ガスレンジの使い方は安全性を重視して、こまかく実習。みんなでミソ汁を作ってみて、試食。

会話：「プロパンガスの元栓を開けます」など、調理手順の言い方を練習。

●第5週「日本での医療について」①

病状や病気、けがの名称の説明。保険制度、日本の医療費について（パナニコムでは医療費は無料）。

会話：病院でのきき方、保険のきき方を。

☆特別講義

馬淵カメラマン夫人で、カンボジア人のサイホンさんに手伝ってもらった。彼女は、日本に5年間住み、しかも母親と兄弟も日本に定住している。それらの経験をいかし、カンボジア人から見た日本、定住者から見た日本について話してもらった。母国語による質疑応答は効果大。

110番、119番への電話のかけ方も必修

●第6週「これからの生活について」

日本へ向う飛行機内での注意（酸素マスクなどの使用法）出入国カードの書き方、大和センターでの学習内容と生活、南林間小学校における難民児童の授業風景などを紹介。定住後の学習環境、JVCの日本語家庭教師についても説明。

会話：大和センターの住所の言い方など。

●第7週「日本での医療について」②

病状の訴え方、医師へのかかり方。脱脂綿、水などを作って応急処置の実習。

会話：「頭が痛いです」などの病状の話し方。「～さん、どうぞすわってください。どうしましたか。口をあけてください」など、医師との対応の練習。

●第8週「非常のときの処置法」

火事、交通事故、病気（赤ちゃんが死にそう）、泥棒、地震などの言い方と対処法を。カンボジアでは地震がないので、火を消す、机の下に隠れて外に出ないなど、細やかな注意を。「日本にも泥棒がいるのか。」との質問もあった。

会話：110番、119番への電話のかけ方を練習。

●第9週「日本での仕事について」

大和センターで受けられる職業訓練の制度、難民の日本での就職状況を説明。日本の企業における賃

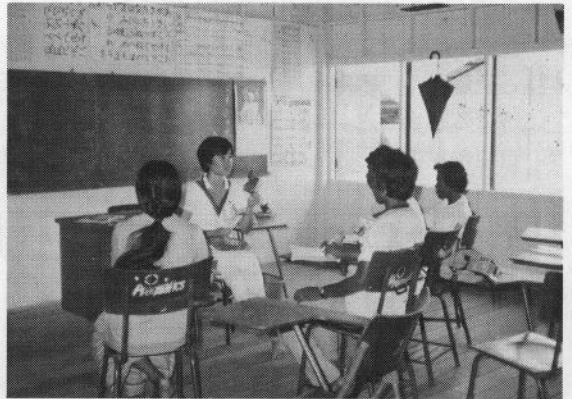
金（基本給と手当て、税金など）、労働時間、休暇、大企業と中小企業の格差、正社員とアルバイトの格差などを話す。

●第10週「日本とカンボジアの違い」

日本は温帯モンスーンで、カンボジアは熱帯サバナ気候（気温は一年を通して約27℃、乾期と雨期の差が大きい）であること。日本で難民が従事している職種と給料（最高と最低）、日本での家計費の割合、物価などを紹介。カンボジア、タイにくらべて、給料も高いが物価も高いことに驚いていた。例えばキャンプでは理髪料は100円～300円くらい。

●第11週「日本の教育制度」と修了式

学校教育制度（義務教育制、教科書の無料配布、授業料のないこと、給食、課外活動など）を映画で紹介。



第11期オリエンテーションを終えて

プログラムをつくる上で注意したことは、難民が日本での生活に対して少しでも不安をとりのぞくことができるように、またすぐに実生活で利用できるようにという点である。今回は、だいたい具体的な生活面での知識であったので理解しやすかったと思われるが、人間関係のようなもの、日本人のものの考え方、見方について十分に準備ができなかった。次回、行なうとすると、題材が抽象的なものや、あるいはおしつけにならないように注意しながら、時間をかけて準備する必要があると思われる。

* さとう かずみ……パナニコム日本語学校のプログラム・コーディネーター。

日本語家庭教師活動とは

森山 久寿子(JVC東京事務所)

◆インドシナから日本へ

戦火を逃れ、ひたすら安全と自由、食糧を求めて国境を越えた人々——数年前まで、私達は揺れ動くインドシナ3国（カンボジア、ラオス、ベトナム）の情勢を、テレビや新聞を通して見ていました。しかし、祖国に別れを告げざるをえなかった人々、肉親と離れ離れにならざるをえなかった人々が、私達の隣に引越してきた時から、決してそれは「海の向うの出来事」ではなく、私達により直接的・間接的に関わりのある問題となったのです。

私達の活動は、難民の少年のところへ、1981年の秋、数名のボランティアが片道3時間かけて通い、土曜・日曜泊りこみで、日本語を教えたり生活指導をしたりすることから始まりました。

ちょうどこの年に、日本に定住した難民の数は、1年前までの493人から一挙に1,203人へと増え、また1975年4月以前から、日本に滞在していた留学生と研修生742人も難民と同様、定住が認められるようになりました。*1

定住難民のほとんどの人が、神奈川県大和市およ

び兵庫県姫路市にある定住促進センター、東京都品川区にある国際救援センターで3カ月間の日本語教育と生活指導を受けてから日本社会へ入ります。

しかし、各定住促進センターで学んでも全てを習得できるわけではなく、またセンターの生活と実際の社会生活とではかなり勝手が違うため、本当に定住難民が手さぐりで日本の生活とむきあっていくのはセンターを出た時からなのです。なかでも、日本語を自由に使いこなせないという言葉による障害の壁は、様々な問題を生む最大の原因となっています。

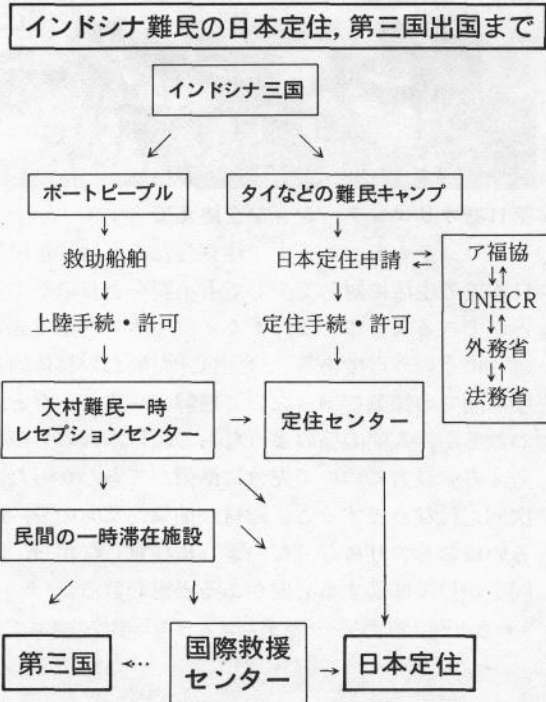
◆「会社で使う漢字、読めません。」

定住難民から最初に私達にきた要望は、「日本語を勉強したい。」というものでした。「今まで勉強してきたていねいな言葉は、会社で使いません。ふつうに話す言葉を教えてください。」「日本語の文法、勉強したいです。」「会社で使う漢字、読めません。」電機器具の説明書をもってきて、「これ何ですか、漢字がたくさんありますですねえ。どんな意味かわかりません。」等々。学校、役所からくる書類、病院での手続きには難しい言いまわしもあって、彼らには意味がわかりません。PTAに行っても日本語が聞きとれず、1回行ったきりで後は出席しなかったお母さん。病院で自分の症状を説明しきれず、訳も分からずに大量の薬を飲み続けていた少年。「大変疲れます。」と雇用主に訴えても「ご飯をたくさん食べればいいよ。」と言われるだけで、後で検査をしたら肺に穴があいており転職を余儀なくされたお父さん。

仏教を宗教とするインドシナの人達は、頭や肩に尊い霊が宿っていると信じているために触れられるのをいやがりますが、気軽にボンと肩をたたく日本人に、何と説明していいのかわらなくて悩んでいた女性。お互いの文化や習慣を知らないために、小さな誤解を生み、日本人と定住難民の間に溝をつくってしまうことがたくさんありました。

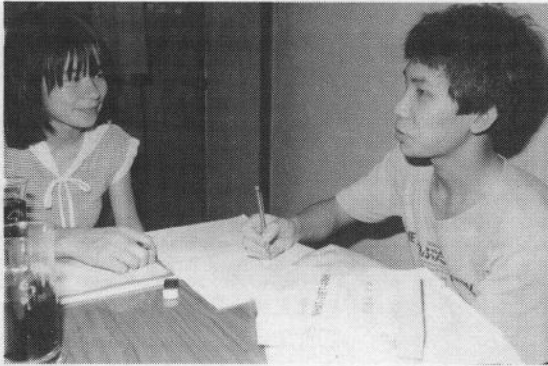
◆ボランティアとして

私達は、上記のような問題に対処していくうちに彼らが自由に日本語を使いこなせないこと、そしてボランティア自身も彼らに対して理解が充分でなかった事に根本的な原因があると気づきました。そこでこの問題を解決するためには、まず私達自身の活



* 1……外務省国連局人権難民課
「インドシナ難民問題」より。

* 2…… P. 7 活動一覧表参照。



動から見直す必要があるという観点から、ボランティアの「心構え」を明確にしました。

- ①定住難民が地域に根ざし、自立した生活をしていくことを目指す。
- ②政治、宗教、国籍、信条などの相違に関わりなく定住難民にとって真に必要な援助を行なう。
- ③常に定住難民の立場で考え活動する。
- ④少なくとも半年以上、週に最低1回は定住難民の家へ通い、責任ある活動を継続する。
- ⑤ミーティングに積極的に参加し、書簡や電話などで連絡・情報を密にする。
- ⑥やむをえない理由で活動を中止する場合は、少なくとも1カ月前に地区連絡係に報告し、引き継ぎを行なう。
- ⑦3カ月に1度、活動報告書を提出することによって、自分の活動の意義を問い直し、問題を明らかにする。

日本社会をつくる市民の1人として、定住難民と私達は共に社会をみつめていく目を持つべきです。しかし安易で一方向的な同情やその場しのぎの活動は、定住難民の自立を妨げ、私達自身の目をも曇らせます。

◆活動の充実とその展開のために

今年3月まで、私達の活動は仕事をもちながら、あるいは学校に通いながらのボランティアが、週末に事務所に集まって1週間分の事務処理をしたり、月1回のミーティングで話し合いをする事で精一杯の状態でした。そのために、十分な情報交換ができなかったり、より必要度を増してきた日本語家庭教師希望者に応じきれなかったりで、活動自体にも支

障をきたすようになりました。また、活動者の事故や苦情に対して誰が責任を負うのかという事もあいまいでした。そこで今年度から、JVCの日本国内活動のひとつとして、日本語家庭教師プロジェクトが承認され、それに伴い専従スタッフを1名置くことになりました。また年間プログラムも立て、それに沿った有効な活動の実施を目標としています。今年度のプログラム内容と、8月中旬までの進行状況は以下の通りです。

①事業の対象者および活動地

現在、日本に定住したインドシナ難民およびそれ以外の国からの難民*2家族を対象としており、活動地は、東京・埼玉・神奈川・千葉に広がっている。

②活動者（専従スタッフおよびボランティア）

③事務局専従スタッフ1名——日本語家庭教師プロジェクトを遂行するにあたっての、雑務、情報収集、連絡、渉外等々を行なっている。

④日本語教師1名——活動の質的向上を図るために、ボランティア研修、巡回指導、カリキュラム、マニュアル作成など、専門の見地からの活動を行なう。現在、募集中。

⑤ボランティア（1984年8月10日現在）

東京地区	13名
埼玉地区	9名
神奈川地区	23名
千葉地区	3名

⑥各地区連絡係

上記⑤の地区から選ばれ、担当地区の定住難民およびボランティアの活動状況を把握し、連絡業務を行なう。また毎週土曜日の連絡係ミーティングに出席しプロジェクトの進行状況等を検討する。現在、神奈川は2名、埼玉・東京・千葉は合わせて1名で、今後、埼玉と東京・千葉の2地区に分け増員する予定。

③活動内容

④家庭訪問指導

前述したような問題を解決するためには、彼らの日本語会話力等の向上を図ることが先決である。そのため主に日本語教授が中心となり、大きく3つに分けられる。①日常会話を中心とし

た日本語の指導。②学生・学童を対象とした学校教育の補完指導。③日常的諸問題の解決を助ける。

④地域教室の開設

定住難民がある程度まとまって住んでいる地域に、日本語教室を開設する。既製の諸学校と違い、定住者の近隣に教室を設け、そこで日常生活に密着し一貫した語学指導を行ない、日本語能力の一層の充実を図ることを主たる目的とする。その他にも、一般ボランティアがこの教室で授業を受けもったり、専門家から学んだりすることによって日本語教授のための研修にも役立つ。また地域に開かれた教室にすることによって、地域の人々の難民問題に対する関心を高め、理解を得ていくことも重要である。現在、定住難民に教室開設に対するアンケート調査を行なうなど、教室確保の準備を行なっている。秋から、試験的に実施される予定である。

④定住難民の日本人家庭訪問、課外研修

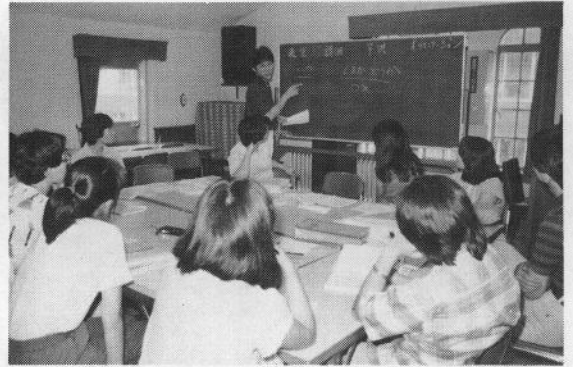
定住難民が日本の文化や生活・風習に触れて慣れ親しむよう、また地域の人々との気軽な交流を図れるようにという事で、5月下旬、神奈川県多摩川へハイキングに行った。50名近く集まり好評だったので、秋にも行楽地に出かけることを検討中。

⑤ボランティアの自己研修

日本語を教えるための教材、技術研究はボランティアの必須条件である。そのために昨年は、4月～6月の3カ月間、約20名のボランティアが新宿および千駄ヶ谷日本語学校で講習を受けた。さらに今年は、7月21・22日、お茶の水YWCAで延べ60名近くのボランティアが日本語教授法の研修を行なった。今回は11月を予定しているが、各日本語学校にも授業料割引等の便宜を図ってくれるよう要請する予定。

⑥テキストとカリキュラムの作成

カンボジア語と日本語対訳の医療用語集を定住難民の方の協力を得て発行。また現在活動中のボランティア、あるいは日本語家庭教師を志望する人に対して、難民の実情を正しく理解してもらうために、『日本語家庭教師って何だろう』を発行。どちらも不備な点が多く、後者については改訂版を作成中。



お茶の水YWCAでのボランティア研修

さらに就学児童に関しては、教科指導以前の問題が顕著なため、どのような対応策が可能なのか今までの活動を洗い直して新たな指導書を作成する予定。

⑦連絡・調整・広報業務

プロジェクトを支え、円滑に進め、他地域へ拡大していくため、ボランティア受け入れ業務、難民の日本国内での定住先調査、各地区間の連絡調整、機関誌『そんぼんと』の印刷・発行等を継続していく。対外的には、関係団体とのミーティングや連絡、情報交換を行なうことにより、多くの団体と協力関係を築いていく予定。

◆これから始める人へ

動機は人それぞれでしょうが、活動に入ったら前向きな姿勢で取り組んで下さい。活動に入る際には動機作文(400字詰原稿用紙3枚)を義務づけています。これは活動が停滞したり、定住難民と慣れあいになったりした時に、自分が当初どういう目的意識で活動を始めようと思ったのかという原点を見失わないためでもあります。これからボランティアを始めようとする人は、定住難民の自立を第1の目的とすると同時に、自分と相手の立場を十分見極める必要があります。ともすれば一方的な活動になり、それ自体に埋没してしまいがちです。自分の関わり方を定期的に点検しながらさらに意義あるものにしていって欲しいと思います。

定住難民とボランティアが、お互いに理解しあいながら生きていく意味を一緒に考えていきましょう。

活動一覧表(1984年8月現在)

活動地		対象者		内容	現ボランティア数
神奈川県	川井宿(横浜市)	カンボジア人	5家族	日本語, 就学児童学習補助	6名
	宿河原(川崎市)	ベトナム人	1名	受験勉強	1名
	瀬谷(横浜市)	ラオス人	1家族	日本語	2名
	つきみ野(大和市)	カンボジア人	6家族	日本語, 就学児童学習補助	4名
	鶴見(川崎市)	カンボジア人	3家族	日本語	2名
	町田(町田市)	ベトナム人	1名	受験勉強	1名
	横浜教室(横浜市)	ラオス人, ベトナム人	数名	日本語	2名
	厚木(厚木市)	カンボジア人	1家族	日本語	1名
	綾瀬ラオス教室	ラオス人	9名	日本語	2名
	長津田(川崎市)	カンボジア人	1名	日本語	1名
	長沼(厚木市)	カンボジア人	1家族	日本語	1名
	橋本(相模原市)	カンボジア人	1家族	日本語	1名
本厚木(厚木市)	ベトナム人	1家族	日本語	1名	
東京都	錦糸町(江東区)	ベトナム人	2家族	日本語	1名
	赤坂(港区)	カンボジア人	4名	日本語, 就学児童学習補助	3名
	糀谷(大田区)	ラオス人	1家族	就学児童学習補助	1名
	西巢鴨(豊島区)	カンボジア人	1家族	日本語	2名
	飯田橋(文京区)	ベトナム人	1名	日本語	1名
	荻窪(杉並区)	アフガニスタン人*2	1名	日本語	2名
	青山一丁目(港区)	レバノン人*2	1名	日本語	1名
埼玉県	大谷(大宮市)	ラオス人	1家族	日本語	1名
	柳崎(川口市)	カンボジア人	1家族	日本語	1名
	蕨(川口市)	カンボジア人	2家族	日本語	1名
	八潮(八潮市)	カンボジア人	4家族	日本語	3名
	上福岡(上福岡市)	カンボジア人	1家族	日本語	2名
	川越(川越市)	カンボジア人	1家族	日本語	1名
千葉県	市川(市川市)	ベトナム人	1家族	日本語	2名
	実籾(習志野市)	カンボジア人	1家族	日本語	1名

※ 新規に常時募集しています。詳細は東京事務所森山まで。

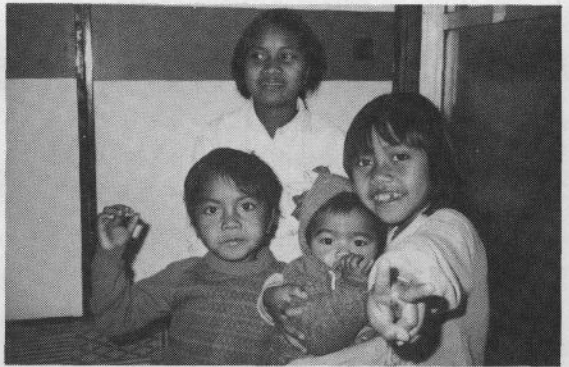
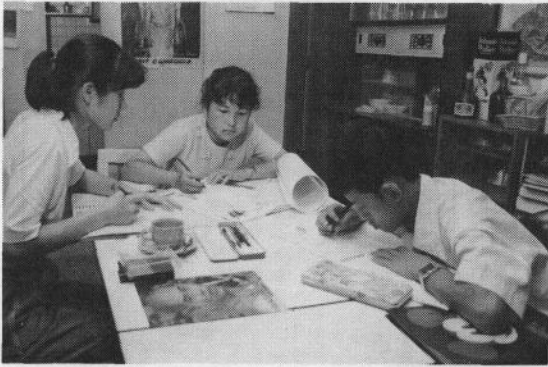
参考テキスト

- ① 日本語の基礎1, 2 (海外技術研修協会)
- ② わかる日本語 Part 1~ (千駄ヶ谷日本語学校)
- ③ 日本語の表現, 文型 中級1 (筑波大学日本語教育研究会)
- ④ 日本語 I れんしゅうちょう(2) (国際学友会日本語学校)

参考文献

- ① わかる日本語の教え方 今井 幹夫 著 (千駄ヶ谷日本語教育研究所)
- ② 日本語教授法の一考察 江副 隆秀 著 (新宿日本語学校)
- ③ 日本語教授法 木村 宗男 著 (凡人社)
- ④ 私家版日本語文法 井上ひさし 著 (新潮社)

「自立する日まで」——日本語家庭教師活動報告



私の教え子であるカンボジアから来た姉と弟の2人は、この1年半の間に見違えるほど成長した。毎週訪ねるたびに「お姉さん、こんにちは。」と言って迎えてくれるその挨拶は、日本人の子と変わらない。学校でも友人の中にとけこんでいて、ときどきバレーボールやバスケットでの活躍ぶりを話してくれる。周囲からも愛されているらしく、中2の姉の懇談会へ行った時など、彼女の友人のお母さんから、「また家に遊びにいらっしやるように伝えてください。」と言われた事もある。

しかしながらこの子たちが、大きなハンディを背負っている事は否めない。特に中2の姉の方だが、母国語による基礎教育の欠如*1が思考力の発達を妨げているため、彼女は学校での授業がほとんど理解できない。とはいうものの本来やる気のない子ではない。ある日私が訪ねていくと、ある漫画を読んで面白かったという。「どんな話だったの?」と聞くと、奥の部屋に行ってその漫画を持ってきた。そして、彼女にとって日本語で説明する事は楽ではないのに、目を輝やかせながら私にその面白さをわからせようと一生懸命に話し始めた。私は、彼女が持っているすばらしいエネルギーに驚かされた。

本来ならば、彼らにとって一番幸せなのは、母国カンボジアで平和に暮らすことだったに違いない。しかし、現実に彼らは日本社会の懐に迎え入れられた。私達が果たすべき義務と、難民と呼ばれる人々を二度と出さないためにはどうしたら良いのかを、共に考えて欲しいと思う。(担当:小林 左樹子)

*1 彼らは主に自国内での戦乱により、教育の機会を喪失している。

カンボジアから来たDさんは、埼玉県蕨(わらび)市にある団地の1階に住んでいて、可愛い娘さんが一人いる若いお母さんです。同じカンボジア人の御主人は、都内の会社に2時間かけて通勤しています。また同じ棟の2階には、病院で働くお母さんと、小学校・中学校に通う妹・弟と一緒に住んでいます。Dさんは、愛娘を保育園に預けて昼間は職業訓練学校(洋裁)に通っているのです。Dさんには洋裁の教科書を中心に日本語を教えています。

Dさんに日本語を教えていてつくづく感じるのは、外国で育った人が新たに日本語を習い始めるのは、いかに大変な作業であるかということです。Dさんは、ひらがな、かたかな、そして一部の漢字も読み書きできるのですが、漢字の持つ意味あいを理解し、十分に使いこなすにはまだ時間がかかるようです。また専門書は難しい言葉で書いてあるので、非常に苦勞するようです。例えば、「裁断には、平面裁断と立体裁断がある」という文では、「裁断」は「布を切ること」と覚えなければいけないし、平面とか立体という言葉も同様です。また「原型の製図方法を解説し、作図の展開をする」とか、「諸説にふれてみる」「概略を述べる」とくれば、一度平易な表現への変換が必要です。

Dさんが、洋裁を勉強し手に職をつけるということは、日本で生活していく上でとても大切なことです。いつも私を笑顔で迎えてくれるDさんの家族それぞれが、職場、学校でいろいろな希望を持っています。回りの私達もできるだけ力になり、1日でも早く彼らが、自力で生活できるようになることを強く願うこの頃です。(担当:山浦 則子)

*2 Rさん一家は特殊なケースで、カンボジアからベトナムを経て直接日本に定住した。日本に留学していた長男が呼び寄せたということで、定住センターには入っていない。

*写真は火曜日担当の安井 久寿ボランティア。



夕方の6時、いつものようにドアをノックすると、「こんばんは。先生、いらっしゃい。」と長女Kさんの笑顔がのぞく。初めの頃「コニチハ」という独特の調子の挨拶をしていたのに比べると随分日本語らしくなってきた。

Rさん一家は中国系カンボジア人で両親と子供7人が一緒に住んでいる。その中の5人の兄弟(成人)が私の生徒である。私はベトナムからいきなり日本の社会に飛び込んできた人達に、どういう方法が一番有効なのかを考え、彼らが実際の生活に則して日本語を学べるようにカリキュラムを組んだ。

ある日、テーブルの上の飲みかけのコップに手が触れてお茶をこぼしてしまった。あっと声を上げてふいてくれたが、この場面がよい教材になった。(こぼす→ぬれる→ふく→しぼる→干す)、(空っぽ、から→お茶をつぐ→飲む)などの言葉がたちどころに理解できたのである。教材、教授法等という言葉におじけづかず、相手の立場に立ってわかってもらおうと考えていれば教材は身の回りにいくらかもあるし、教え方を工夫することも楽しみになる。

Rさん一家とつき合って9月で1年になる。礼儀正しく控え目でよく勉強する姿に現代の日本人像を重ねて考えさせられることが多い。また言葉を通してカンボジアやベトナム*2の考え方の違いや偶然の一致を見出して面白がったりしながら、文化交流が行なわれる。日本語家庭教師として彼らと接しながらさまざまな面で「教えることは教わること」を実感している。Rさん一家が日本人社会の一員となるために私の力が役立っていることを思うと、やりがいのある仕事なのである。(担当：山上 和子)



「朝、会社へ行こうとしたら車のエンジンがかかりません。困っていると近所の人が出てくれました。」そう語ってくれたBさんは、綾瀬市に住む中国系のラオス人。現在は、奥さんと一緒に電気関係の会社で働いていて、綾瀬に引越してきてからおよそ1年になる。3人の子供も小学校に通っている。

日本語の授業は、日曜の午前10時から2時間。今日は、先回の復習から始まった。今年の6月中旬からBさん一家に日本語を教えている深津ボランティアは、手作りの単語カードを使う。そのカードには教科書の文章から抜き出した言葉などが書いてあるのだが、傍点がふってある。これをBさんたちが読み、その意味を説明する。Bさん夫婦は、ラオス語・中国語(マンダリン語)・英語を解することもあり漢字の意味はわかる。しかし、音訓読みが充分でないため、例えば、「しゅじん(主人)」と「しゅうじん(囚人)」を区別することが難しい。そこは、深津ボランティアが、例文などをまじえながら詳しく説明してゆく。簡単な小テストを済ませると次の新しい課へ進む。

授業終了後、「今一番心配なことは？」とBさんに尋ねると、小学校に通う子供の教育だという。特に上の2人は途中から遍入したこともあり、授業に追いつくのが大変だそうだ。しかし、3人ともプール焼けで真っ黒。元気そのものだ。ここはゴミゴミとした都会と違い隣同士のつながりがしっかりしている土地柄でもあるため、近所の方々がBさん一家に「何か(困った事が)あったら言って下さいね。」と声をかけてくれる。回りの方々が、Bさん一家を地域ぐるみで暖かく見守っている。(担当：深津 高子)

声

難民問題を考える草の根づくり

— 伊勢原市の市民グループ

山口 寿則

4年前に友人の1人が、星野事務局長の講演を聞き、その事が難民問題を考える発端となりました。以来仲間4人と共に、地域に住む人々を対象にイベントや学習会など「難民問題を考える草の根運動」を続けてきましたが、今回はT/E読者との有機的関係を築き、自主的な活動が生まれる事につながればと思い筆を取りました。

現在までの主な活動は右下の通りですが、講演会やパネル展により、初めて第3世界の窮状を知った人々は、一様に驚きと同情の意を表わしてくれました。しかし日常生活に追われている市民にとって、感情を持続させ、それを行動に結びつけることは極めて難しいことです。事実、イベント等に参加した多くの人中で、スタディー・グループに出席しているのはほんの数名にしか過ぎません。とはいっても、この問題の存在をアピールできた事だけでも活動の意義はあったと思っています。

今後は、この地球的規模の問題を自分自身の問題として認識できる人々を開発する事を目標に、スタディー・グループの継続・拡充と、誰でもが参加できる分かり易い運動を地道に続けていこうと思えます。

こうした活動は、主体的に関わろうとする人の意志・行動なくして広がってはいきません。ですから周辺に同志のいない地域活動は、いろいろな面で難しい状況に直面します。事実、私達でさえ問題意識が不十分であったため、数々の試行錯誤を繰り返してきました。これを乗り越えるためには、積極的な意見の交換や運動に対する指摘が必要です。お互いの活動を活性化させ運動の輪を広げるために、JVCの活動経験者や会員、T/E読者が相互に連絡し協力できればと思います。私達のページであるこの「声」の欄をそのための情報交換の場としましょう。あなたも、是非参加して下さい。今後の活動のためにも、アドバイスやご意見をいただければ幸いです。

〒259-11

神奈川県伊勢原市伊勢原1-16-4

山口 寿則

TEL. 0463-95-0234



家族総出でバザーに参加（左端山口さん）

現在までの主な活動

- 1982年秋から ☆「アジアの子どもたちに水を」の募金キャンペーン開始。MIRCを通じ、JVC給水プロジェクトへ。
- 1983年3月 ☆「アジアの貧困を考える草の根づくりクロントイスラムからの報告」開催。
報告者：高塚 政生（JVCバンコク）
☆同時開催：写真展「インドシナからやってきた子どもたち」
- 7月 ☆JVCバザーに初参加。野菜好評を博す。
- 10月 ☆レバノン緊急アピールに応じ、救援募金キャンペーン実施。参加者、約50名。
募金総額 8万円。
- 1984年3月 ☆「映画と講演のつどい」開催。
映画：「国境をこえた人々——カオイダ
ン難民キャンプの記録」
講演：星野 昌子（JVC東京事務所）
参加者 約30名。
☆同時開催：定住難民（ラオス・ベトナム）との交流会
- 4月 ☆日本語家庭教師活動開始。2名参加。
☆難民問題に関するスタディ・グループ「そむらいん」発足。参加者7名。
- 5月 ☆第2回「そむらいん」参加者7名。
- 6月 ☆JVCバザーに参加。
☆ラオスロケット祭りに協力参加。
- 7月 ☆第3回「そむらいん」参加者7名。
☆日本語家庭教師オリエンテーション実施。
希望者5名のうち、2名が活動開始。
☆第4回「そむらいん」参加者7名。

「難民の保護と援助にかかわる国際的枠組 — 平和研究の視点から」

報告 栗野 鳳 (日本平和学会会長)

現在の国際社会において、種々の国際問題に対処する国際機関として国際連合(国連)および国連関係機関その他がある。難民問題についても国連関係機関に属するもの、国連外のものがある。前者ではUNHCR(国連難民高等弁務官事務所)とUNRWA(パレスチナ難民救済事業機関)とがもっぱらその任務に従事しているほか、児童保護、教育、保健、食糧、職業訓練、定住に関連する開発援助などについてUNICEF*1、UNESCO*2、WHO*3、FAO/WFP(世界食糧計画)、ILO*4、UNDP*5などが協力している。国連外ではICM(国際移民委員会)が第三国定住のための移動について援助する。国連などは政府間の国際機関であるが、非政府間国際機関も重要な役割を果たしており、ICRC(赤十字国際委員会)が医療その他の面で緊急援助を行なうほか、VOLAGs(voluntary agencies)と略称で呼ばれる民間援助団体がかかわっている。VOLAGSには組織上必ずしも国際的でない、つまりある国の国民を主とするものもある。なお、政府機関でないものはNGO(non-governmental organization)と呼ばれるときもあるが、この用語には狭義、広義それぞれの使い方がある。

さて、これらの機関がそれぞれの機能を発揮しているのだから、難民問題に対処する国際的枠組は充分であると思われるかもしれないが、現状は決してそうではない。それは、各機関やその関係者の努力や熱意が足りないからというわけではない。それらの性格、権限などに本質的な問題があるためである。

UNHCRは難民受入国の政府に対して、難民に関する何らかの措置を強制することはできないのは勿論、要請を押し通す力がはなはだ弱い。普通は、要請というより「お願い」して、「やって頂く」ことしかできない。しかも、「難民条約・議定書」による難民の定義ははなはだ狭く、亡命者と呼ぶ方が適当である。国連総会の決議によってUNHCRにそれ以外の難民に対する援助を実施させることはできるが、国連(総会)自体が充分な対応をしているとは言い難い。特定の国や地域に大量の難民が発生してはじめて、国際会議の開催を準備し、その会議で有志の国が援助の意思を表明し……といった段取りを進め

るのが現状である。要するに、国際的枠組の全体に関して言及するならば、難民問題については「対症療法」の措置に追われている状況である。

しかも、最近数年間、世界の難民問題は量的にも質的にも複雑困難の度を深くしている。難民は、亡命者だけでなく、戦禍を避けて国外や国内の他の地区に逃れた流民(displaced persons)も含む、というのが普通の考え方にはなっているが、戦争以外の状態、原因も増加している。天災と人災が微妙にからみ合っている場合も少なくない。難民の大量発生の原因を究明し、そこに適切な措置を施しえないものか——「予防医学的」対応はできないものか。

平和研究の詳細について説明する暇はないが、それは新しい学問の領域として自らを確立しつつあり、その最近までの成果に基いて、国際問題などに関して分析や批判を加え、さらに解決の方策について示唆を提示しつつある。難民問題についても同様な役割を負うるのではなからうかと考えられる。

平和とは、国と国との間に戦争が行なわれていない状態であるといった消極的なものでなく、軍事力などの直接的暴力はもとより、「構造的暴力」すなわち政治経済社会のしくみ¹がもたらす抑圧なども除去されている状況を意味する。これは最近では学生などの間でも常識になっている平和への積極的な意味であるが、そうすると平和は人権保護や健全な開発とも深く関連してくる。この平和・人権・開発の「三位一体」的な結びつきを念頭に置いて難民問題を考えてみれば、どうであろうか。難民の大量発生の原因は、平和・人権・開発のゆがみ²と考えられないであろうか。さらに、国と国とが形成する国際社会を超えて、「人類共同体」といったものが考えられるが、そこでは平和・人権・開発が満足な状態になっている筈である。人類の歴史は、その方向への歩みであると考えれば、難民問題の根本的解決もその過程如何にかかっていると云うる。

なお、現在の国家、国際機関、国際社会を少しでもこうした方向に誘導して行く上で、NGOやVOLAGSの果す役割の意義は極めて大きいと云うる。

*1 国連児童基金 *2 国連教育科学文化機関 *3 世界保健機関 *4 国際労働機関 *5 国連開発計画

「インドシナ難民、西へ向う」

連邦当局発表の統計によれば、過去3年間に東南アジアの難民キャンプ及びプロセッシング・センターから、直接アメリカ最大の人口稠密州であるカリフォルニア州に定住した難民の数は10万3,000人にのぼるといふ。さらに、この数字のほぼ1.5倍の数の難民が最初に定住した州を離れ、第2次流入者(secondary migrants)としてカリフォルニア州に移り住んできていると見られている。

第2次流入に関する資料はまだ充分ではない。難民は移住に際して、関係当局に届け出る必要はないとされている。福祉の受益者として申し込む場合は別だが、そういう難民は少ない。ワシントンに本部を置く、難民問題の政策分析と調査を目的とする民間の機関である「難民政策グループ」の予備分析によれば、米国のほぼすべての州で、難民の数が第2次流入によって増減を繰り返している。ところが、カリフォルニア、マサチューセッツ、ヴァージニア、ロード・アイランド、ウィスコンシンクの5州だけは増加の一途をたどっており、中でもカリフォルニア州は難民数の増加が群を抜いて最大であるという。現在カリフォルニア州内にいる約25万人のインドシナ難民のうちの25～30%は、最初他州に定住した人々であると見られている。

それでは、なぜこれほど多くの難民が最初の定住地を後にし、カリフォルニアへと向うのであろうか。第2次流入者がカリフォルニアに引き寄せられる主な理由としてよく引き合いに出されるのは、同州の寛大な福祉政策の水準と長期にわたる財政援助受給期間である。国家機関である「難民定住対策室」の委託による最近の調査で如実に示されているのは、難民が各種の社会保障手当の高い州へと移住する傾向にあり、その中でもカリフォルニア州が最高額を誇っているという点である。カリフォルニア州在住のインドシナ難民のうちで、米国に来てから3年に満たない人々のほぼ90%が何らかの福祉援助を受けている。この数字は全国平均の54%と対照的であるが、その全国平均もカリフォルニア州を除いて計算すると37%という低い数値になるのである。

米国カトリック協議会サンフランシスコ支部のジョン・ヤーリングは、第2次流入者の主目的は福祉



の受益者資格を得ることではないと考えている。彼によれば、「我々のところにやって来る人々が求めているものは、ほとんどの場合仕事であって施しではない。」というのである。とはいえ、彼だけでなく他のボランティア機関の職員達も認めているのは、第2次流入者であろうとなかろうと難民達を福祉から切り離しておくことは日ごとに難しくなっているということである。

原因が何であれ、第2次流入者の流入が今後も続くであろうことは、難民自身もそして福祉を与える側の人間も予想している。回復した経済、全国平均をはるかに下回る失業者数、そして高度技術産業、といったものが、難民をカリフォルニアへと誘引する役割を果たしている。温暖な気候もまた大きな要因である。

けれども、カリフォルニアが第2次流入先として特に選ばれている最も大きな要因のひとつを挙げれば、同州内には東南アジア系の民族社会が既にできあがっているという利点である。インドシナ難民の最初の一団が1975年に到着し始めた当時は、地域にとけ込む上で援助してもらえるような同じ民族の集まりは全く存在しなかった。こういった諸条件と難民を全国各地に散在させようとする計画的な政策にもかかわらず、最初にやって来た難民のうち20%程はカリフォルニアに定住し、ベトナム人、ラオス人、カンボジア人それぞれの同族社会の核を作り上げたのであった。

最初にやって来た難民達が自分達の生活基盤を確立すると、他の難民とくに親せき関係にある者たちが後に続いた。カリフォルニアは、以前から日本人



や中国人、フィリピン人の大きな民族社会があり、州内の人口の50%がいわゆる少数民族という地域でもある。インドシナ難民にとっては紛れもなく、自分達が異邦人であることをあまり意識させない場所なのである。ちなみに、オレンジ・カウンティは6万7,000人のインドシナ難民を受け入れ、ロサンゼルスには8万～9万人が居住している。サンフランシスコ商業地区近辺には、今やほとんどがベトナム人によって占められている一画もある。

定着した難民群の中で最も大きくかつ古いのはベトナム人のグループであり、カリフォルニア州内のインドシナ難民のおよそ80%を占めているが、ベトナム人以外の難民グループも相当な数に上る。例えば、ロングビーチでは人口の5%がカンボジア人である。

第2次流入により集中して定住するに至った顕著な例としては、ラオス北部出身のモン族がある。

1981年以来、かなりの数のモン族及び他の山岳民族が米国各地からカリフォルニアのセントラルバレーに移住し、マーセドとフレズノの町を中心として新しいモン族社会が確立されている。

今年29歳のダン・マウアは、永住の地を求めて39州をめぐる歩いた後、1977年3月にマーセドにやって来た最初のモン族である。その前年、彼はヴァージニアに定住したのだが、そこで彼はひとつの決意をした。国外での離散状態で生き残るためには、モン族は再び決集し農業生活に帰るべきである、と。

ダン・マウアが初めてマーセドに来た当時は、ベトナム人の小さな集落が1つあったが、そのうちのほとんどはその後都心の大きな街に移り住んでいった。トマト摘みの仕事や、いくつもの臨時雇いの仕事の後に、彼はいくらかの土地を購入し、後日店を開いた。このニュースは米国中に知れ渡り、やがてモン族は大挙してセントラルバレーを目指したのがあった。現在、マーセドにおけるモン族の数は、約7,500人だが、ほとんどが市街地に住んでおり、全人口の13%を占めている。米国内に定住した5万3,000人のモン族難民のうち、今やおよそ3分の1がこのセントラルバレーに移り住んできたとみられる。

第2次流入者の中には、中西部及び東部の大都市

の中心部で経験したいざごごについて話す者もあるが、カリフォルニア州では民族間の緊張は極めて小さい。ずっと以前から定着しているラテン系、アジア系の人々、そして言うまでもないことだが、南から国境を越えてやって来た大量の、いわゆる不法入国者と比べれば、大半のインドシナ難民社会はまだまだつつまじやかなものである。

とはいえ、いくらかの暗影が漂っていることもまた事実である。モン族の人々は、マーセドでスペイン系や黒人の貧しい人々と季節的な農業の仕事めぐって真っ向から競合する関係にある。このことは少数民族間の緊張へとつながり、そして難民の福祉への依存度が高いことがこの緊張状態を更に悪化させている。モン族が定住し始めた当初から彼らと共に働いているジョン・ハーガンデギー神父は次の様に警告する。「失業率が18%を超えた町では、難民をとりまく緊張によって不快な事態も起こりかねない。そうならないためには、経済を回復させ、社会全体の風潮を好転させることである。」

このような緊張を少なくし、すでに大量の流入によって重圧のかかっている難民社会に対する負担を軽減する必要があるが、このため政府は新しくやってくる難民については、近い親族関係のない者をすでに難民が多く住む地域から遠ざけて住ませるといった難民配置政策を提起した。ボランティア機関も、難民が1つの地域に集中して難民社会を作り上げてしまわないように定住活動を以前から調整して来た。しかし、こうしたボランティア機関の人々も、難民の配置政策がどんなに条文化されても事態が改善される見込みはあまりないと主張している。というのは現に、自分自身で選択したのではない州に定住するよう強いられた難民が、毎日カバンに荷物を詰め込んで第2次流入先としてカリフォルニアや、人数はだいぶ少なくなるだろうが、それ以外の州へと向かいつつあるからだ。結局は、難民が自分で選んだ場所に行って理性的に自分達の同化を図るに任せられた方がはるかに得策である、というのが前述のボランティア機関の示唆である。(翻訳：平井 道子)

JVCプロジェクト

1984年7月31日現在

活動地名	活動内容	出資団体	担当者
タイ カオイダン (カンボジア 難民)	●西崎憲司記念技術学校 自転車、牛車、モーターバイク、自動車、水ポンプ、発電機の整備技術を習得する。7月現在、学生数529名。基本的な技能訓練を通じて、本国帰還あるいは第三国定住していくカンボジア難民(15才以上)の自立を助ける。生徒への技術書配布を行なった。	UNHCR レフュージーズ・インターナショナル	ソムウェック・ルチャイシット トンディー・ソムカネ 稲垣三千穂
	●コンストラクション 給水=タキアングムからキャンプまでの給水配管を行なう予定で、調査・予算見積りを完成した。しかしタイ政府はキャンプ縮小計画の中で、給水工事を認めない方針を示した。UNHCRとJVCはこの方針の下、工事実施を断念した。 電気=39本の防犯灯の設置を完了した。今後、発電機及びシステムの保全作業を継続していく。	UNHCR	金子一弘 永井聖子 パニット・ポティビ 松坂 優, 大村 卓
タイ・カンボジア 国境 (カンボジア 難民)	●レントゲン移動診療 移動レントゲン車による、難民村およびタイ被災村の病院への巡回レントゲン診療。 ICRC(赤十字国際委員会)や、海外の医療団体との協力は順調に進行中で、2月からは、タブラヤ郡病院の農村巡回診療のプログラムに参加。	WFP/UNBRO 日本青年会議所 関東地区、医療 部会 西本願寺 結城青年会議所 城西病院	林 達雄 サルミエント・ロドリゴ クリアクライ・プティ ヤビブン スラ・プロムチャン ヨユット・パンサーイ 大澤洋子
	●ノンチャン難民村・補助給食 難民村の栄養失調児、病人、妊産婦、乳幼児とその母親を対象とした補助食供給と栄養教育。 ノンチャン村は砲撃される可能性があり長く留まる事が出来ないため、補助給食はカオイダンにあるキッチンで準備される。その種類は栄養失調児と病人のために調理されたものと、テイクアウェイパック(3歳以下の幼児とその付き添いの母親及び妊産婦等のための生野菜、漬物、肉等を袋に詰めたもの)の2通り。	WFP/UNBRO	武田長久 イサラサック・ジャロンウォン ソムチャイ・ジャイピアーン 荻野美智子、浜野敏子 スニー・サカオラット トンチャイ・クラタルムボン ピアラット・ヴィバスラ モントン
パナニコム (第三国定住待ち の難民一時収容施設)	●日本語学校 日本定住希望者のための日本語教育およびオリエンテーション。6月カオイダンで政府定住調査団がインタビューを行なった結果、61名がパナニコムに来る予定。現在彼らはカオイダンで移動許可待ち。	天理教千葉	佐藤和美、鈴木絵里子 ティアン・パントウー 池田剛太郎、浜崎妙子
タイ農村	●給水 スリン県12カ村での共同井戸掘り作業及び基礎的健康教育を行なう。6月は2カ村5本の井戸を完成。	モラロジーMIRC NTV* 一般寄付	佐藤正喜、井戸智樹 ブンナム・チャルンプリトゥム カモン・ミンムアン
バンコク市内の スラム	●スラム改善 奨学金援助: スラム児童のための学費援助 図書館: 児童、成人のための図書館 建材提供: スラム立退き者への物資援助	モラロジーMIRC NTV* 庭野平和財団 今井記念海外協力基金 JOFIC, 一般寄付	タウィチャイ・タムクナノン 伊藤真理子 ヴァラナット・ドゥアンウドム 加藤哲也

* NTV 24時間チャリティー委員会

活動地名	活動内容	出資団体	担当者
カンボジア (農村部)	●井戸掘り タケオ県で農場のための深井戸掘り	LWF/LWS	箕田健一
ソマリア (東アフリカ)	●農業による自立促進 エチオピアからのソマリア難民に対するマガネイ・キャンプでの農業による自立促進プロジェクト。灌漑水路建設進行中。一部完成した所では種まきが始まった。難民労働者のための「読み書き教室」開設。	UNHCR レフュジーズ・インターナショナル 一般寄付	税田芳三(ソマリア事務所長), 柴田久史, 山賀望幸 高橋一馬, 掛村 均 ソマリア人スタッフ 16名 井本勝幸, 大嶽 聡
レバノン (中近東)	●医療ボランティア派遣及び緊急物資援助 4月30日をもって、医療ボランティア派遣については無期延期。今後は現地の NGO (アーメル, テル・デ・ゾム) と連絡をとりながら緊急事態における物資・資金援助に備えていく。		
人材派遣・養成プロジェクト			
シンガポール	● UNHCR - ホーキンスロード・ベトナム難民キャンプの管理・運営	日本YMCA同盟 アジアキリスト教会議	ニール・リー
ニカラグア	● ICM - 移民受け入れ業務 ICM と JVC の協約によるボランティア・トレーニング・プログラム。	ICM	福村州馬 (9月1日帰国予定)
フィリピン (パターン・プロセッシングセンター)	● ICM - 第3国定住手続きにともなう医療業務 第3国(主にアメリカ)へ出国していく難民の最終的健康チェック。6月12日～16日疾患を持った難民の付き添いでロスアンゼルスへ。	ICM 結城青年会議所	竹内敦子
タイ	● マヒドン大学で熱帯医学研修中。	結城青年会議所	林 達雄
日本国内	● 日本語家庭教師 東京・埼玉・神奈川・千葉に定住している難民の家庭あるいは合同教室を訪問して、担当のボランティアが日本語教授と生活指導を行なっている。 * 機関誌「そんぼんと」発行	禅林寺 UNHCR 中部善意銀行 一般寄付	森山久寿子 他約40名
	* バザー, ハンディクラフト販売 * カオイダ「国境を越えた人々」上映運動 * スタディー・ツアー企画実施 第3回を8月1日から8日までの日程で実施した。 参加者6名。	西本願寺 (高岡寺青)	関田鶴子 他約20名 鴛田三芳他 熊岡路矢他
東京事務所 (本 部)	渉外, 事業計画, 資金調達, ボランティア調整, 会計総務, 情報収集および広報等。 機関誌「トライアル・アンド・エラー」発行 JVC説明会～毎月第1・第3月曜日 午後6時から9時まで。 * TELEX 発信・受信便宜供与	全国社会福祉協議会 一般寄付 博報堂	岩崎駿介(代表) 星野昌子(事務局長) 熊岡路矢, 鴛田三芳 佐々木志保, 下園宏司 大野直樹, 他20名
タイ バンコク事務所	渉外, 事業計画, 資金調達, ボランティア調整, 会計総務, 情報収集および広報, バザー等 季刊「ニュース・レター」(英語・タイ語)発行		高塚政生(バンコク事務所長), 本橋 栄 嶋 紀晶, 石橋節子 ボンビモン・チャイブーン 山西映子, 勝俣江美 浅井陽次, 他約10名

JVCの活動とその目的に御理解を

▶**JVCとは**—Japan International Volunteer Center
 は1980年2月、タイのバンコクで設立された民間救援団体
 です。1979年暮れの、インドシナ難民の大量流出をきっかけに、日本から駆けつけた若者と、現地タイですでに活動を始めていた日本人とが一体となり、現在の組織の原形ができました。JVCは、活動者の自発的な意志に基づき、日本の個人・団体からの寄付金、国連機関からの委託金他によって運営されています。JVCは、人種、国籍、習慣、宗教その他の信条の違いを越えて、難民および同様の窮境にある人々を対象にできる限り継続的な活動を行ないます。

▶**JVCの会員募集について**—会員は、総会に出席し、JVCの方針などを決定する他、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・上映会・学習会等へ参加することができます。また正会員には自動的に、機関誌(T/E)をお送りいたします。会員の種別と年会費は以下の通りです。

- ・正会員 (一般会員 10,000円 活動者会員 3,000円
 団体会員 30,000円 学生会員 3,000円)
- ・賛助会員 金品による支援(金額は自由です。)

▶**機関誌『Trial & Error』のみの購読について**

- ・毎号1冊送付 年間購読料 3,000円
- ・毎号4冊送付 年間購読料 10,000円

▶**送金の方法**—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。

- ①会員：東京5-48365 加入者名-JVC会員係
- ②T/E：東京3-54186 加入者名-JVC東京事務所
 (住所、氏名、購読開始月をお書き添下さい。)

▶みなさまの募金を支えるJVCの活動—救援活動をより充実させるため、以下の募金をお願いしています。なお募金の20%をJVCの運営経費に充当させていただきます。

- インドシナ難民救援募金**(7月小計 3,000円) タイ国内にある各難民キャンプのプロジェクト費にあてられます。
 - クロントイ・スラム募金**(7月小計 5,500円) バンコクのクロントイ・スラム内の図書館の運営およびスラム立退き者のための建築資材購入費に使われます。
 - デッグ・スラム奨学金**(7月小計 57,500円) バンコク市内のスラムの子供達が学校へ通う費用を援助します。
 - アフリカ難民救援募金**(7月小計 407,895円) ソマリアでの難民自立促進農業プロジェクト費として使われます。
 - レバノン被災民救援募金**(7月小計 1,500円) レバノン被災民に対する医療活動及び物資援助に使われます。
 - 日本語家庭教師募金**(7月小計 424,500円) 定住難民のための日本語教材費と家庭教師の交通費に使われます。
 - 医療募金**(7月小計 15,500円) 緊急事態が発生した場合、速やかに医師を派遣したり、医薬品などの緊急救援物資を輸送するために使われます。
 - ボランティア募金**(7月小計 3,450円) 現場で活動を続けるボランティアの健康管理費にあてられます。
 - JVC運営経費募金**(7月小計 275,772円) 現場を支えるのに不可欠な事務運営経費、人件費に使われます。
 - 無指定募金**(7月小計 1,150,229円)
- ▶**送金の方法**—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。
 東京9-27495(募金種目名をご記入下さい。)

編集後記

▶40号を読んだ方々から、叱咤激励の手紙をたくさんいただいた。是非読者の「声」特集を掲載したいと思う。どうやら私は「鋼鉄の鉛筆」をプレゼントされたようだ。

▶JVCも設立されて5年目を迎えた。現在、あらゆる意味において総体的な活動及びその方針を見直すべき時期にさしかかっている。連日、今後の活動方針、人材及び自己資金の確保をめぐる議論が重ねられている。何にも犯されることのないJVCの理念は実践のためにある。

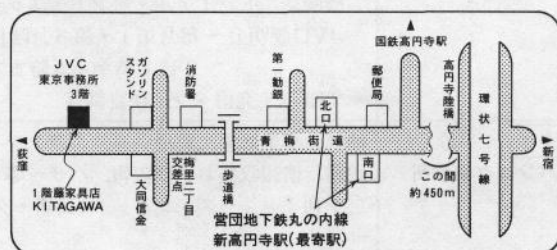
▶最近、新聞やテレビでアフリカの飢餓の惨状を伝える報道が増えているが、医師・看護婦の動きも活発になっている。この夏、金田衛医師(モザンビーク)、徳永瑞子看護婦(エチオピア)が、NTVの取材班に同行、調査。今秋には、エチオピアへ本格的調査団を派遣する。飛べ、医療人!

▶訂正とお詫び 38-39号 p.27, 安岡孝顕氏→保岡孝顕氏。40号 p.7, 栗本 鳳氏→栗野 鳳氏。

☆これまで項目無指定(無記名)の募金は、JVC成立の経緯から全てインドシナ難民救援募金として計上していましたが、高額になりつつあるため今月から新たに「無指定募金」を設けました。今後はJVC全体を支える募金として最も必要としている活動へと充当させていただきます。

昭和59年8月20日発行(毎月20日発行)

編集人 下 園 宏 司
 発行人 星 野 昌 子
 発行所 日本国際ボランティアセンター(JVC)東京事務所
 〒166 東京都杉並区阿佐谷南1-1-5 安田ビル3F
 ☎ 03(316)3253
 バンコク事務所 Japan International Volunteer
 Center, 67 South Sathorn Road
 Bangkok, Thailand
 ☎ (286)4857
 印刷所 ㈱ベスト・プリンティング
 *本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。



定価 送料共 300円